薬用植物園かわらばん

皆さ～んチョット覗いてみませんか？
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ・・

２０１８年
９月２５日
第５２号

チョウセンアサガオ（ナス科）

今、園内でひときわ存在感のある白い花が見られます。熱帯アジア原産の一年草。江戸時代にわが国に渡来し、薬用のために栽培され、野性化したものもあります。別名、曼陀羅華（マンダラゲ）。この名は法華経から出ていますが、仏典のものは本植物とは別もので、全草にアルカロイドを含み、種子での含量が最も多いです。

有名なところでは、江戸時代の蘭方外科医、華岡青洲は、本植物の果実、烏頭、白芷 、当帰、川芎、天南星などからなる「通仙散」と名づけた麻酔薬を創製し、1804年、史上初の全身麻酔による乳ガンの手術に成功した話ですね。別名のキチガイナスビの名は、この植物を口にすると、はじめ興奮ついで麻痺をおこし、興奮期には狂騒状態となって走りまわるので、そのように言われるようになったようです。非常に猛毒の植物であり、絶対に口にしてはいけません。

キカラスウリ（ウリ科）

今年は圃場で姿が見られず残念と思っていました。ところが園内ではないのですが、学校のフェンスに卵円形の実がぶら下がっているのを見つけました。まだ実は緑色で、仲間のカラスウリとの区別がつきにくいのですが、カラスウリは形は卵円形ですが、もっと細長いのでキカラスウリと思われます。この後熟し、黄色くなります。これが「キカラスウリ」の名の由来です。白いレースを付けた花は夏の夕方から咲き、多くの人を魅了します。

種子を生薬、栝楼仁（カロニン）といい、鎮咳、去痰、解熱に、また根を栝楼根（カロコン）といい、解熱、鎮咳、排膿を目的に用います。かつては、根から作ったデンプンを天花粉（テンカフン）という名で、ベビーパウダーとして用いていました。

今、こんな草木が楽しめますよ！！